

北海道中川地域の上白亜系から産出した長頸竜類化石

望月 直*・高木榮一**・疋田吉識***

*北海道大学理学院・**旭川市春光台・***中川町自然誌博物館

Plesiosaur fossils from the Upper Cretaceous in Nakagawa Area, Hokkaido

Sunao Mochizuki*, Eiichi Takagi** and Yoshinori Hikida***

*Graduate School of Science, Hokkaido University, North 10 West 8, Kita-ku, Sapporo 060-0810 (oanus@mail.sci.hokudai.ac.jp); **3-10-23, Shunkohdai 2-jo, Asahikawa 071-8142; ***Nakagawa Museum of Natural History, 28-9, Yasukawa, Nakagawa-cho 098-2626 (nmhikida@coral.ocn.ne.jp)

Key words: Plesiosaur, Upper Cretaceous, Yezo Group, Nakagawa

1973年9月、北海道北部の中川地域から長頸竜類化石が発見された。採集地点は、天塩川水系の左の沢川の源流地域付近に位置する(図1)。化石はいずれも30~50cmの大きさをもつ暗灰色の石灰質泥岩団塊に含まれ、総計51個の転石として採集された。その産出層準は、蝦夷層群羽幌川層中部の砂岩泥岩互層中の泥岩(層厚30m以内)と考えられ、化石を含んだものと同じ石灰質団塊が特徴的に産出する(図2)。化石が産出した層準の年代は、放散虫化石からカンパニアン(岩田ほか, 1998)とされていたが、浮遊性有孔虫化石はコニアシアンからサントニアンを示すと考えられ、更なる検討が必要である。

団塊からは、破片を含め320点の骨のほか胃石や軟体動物化石なども産出する。骨化石は、団塊中で部分的に関節した状態で保存されている(図3)。頸椎、前肢帯、後肢帯などの要素に重複が認められること、その大きさに明瞭な差があることなどから2個体が識別できる(図4)。頸肋骨や腸骨などの形態から、両個体ともエラスモサウルス科に分類できる。一方の個体(図4-I)では、間鎖骨の前縁と後縁が凹である点が*Futabasaurus suzukii*と共通するものの、椎体の腹側面に稜がある点が異なる。もう一方の個体(図4-II)は、頸椎の椎体の背腹径が横径に対し小さい点と、椎体の腹側面に稜が無い点が*F. suzukii*に類似する(Sato *et al.*, 2006)。これらの化石は、中川町自然誌

博物館にNMV-1として所蔵されている。

文献

岩田圭示・菅井良洋・疋田吉識, 1998. 長頸竜産地より産出した放散虫化石. 中川町自然誌博物館紀要 1, 53-58.

Sato, T., Hasegawa, Y. and Manabe, M., 2006. A new elasmosaurid plesiosaur from the upper Cretaceous of Fukushima, Japan. *Palaeontology*, 49, 467-484.

図1. 長頸竜類化石の産出地点. 国土地理院発行1/25,000地形図「天塩中川」、「佐久」、「泉源」、「天塩清川」を使用。

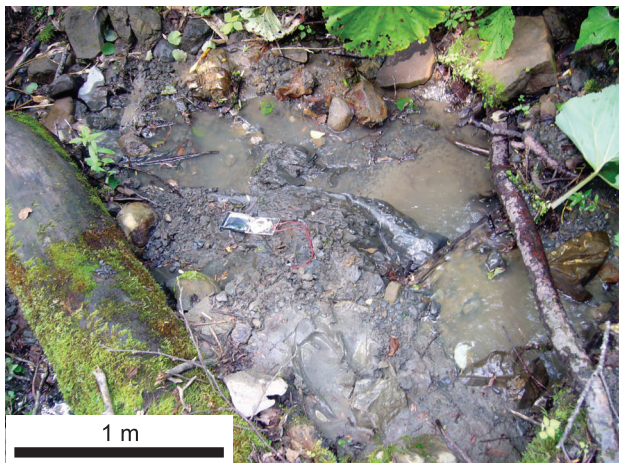


図2. 化石が含まれていたと推定される露頭。平行葉理のある暗灰色泥岩が露出する。

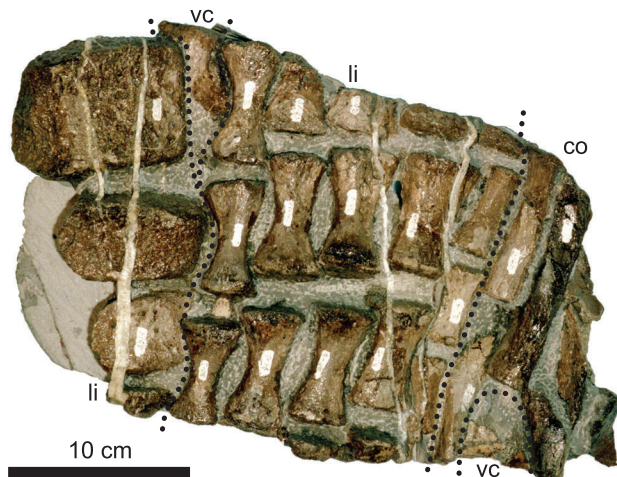


図3. 団塊中の産状の一例。前肢(li)、頸椎(vc)、肋骨(co)が含まれる。

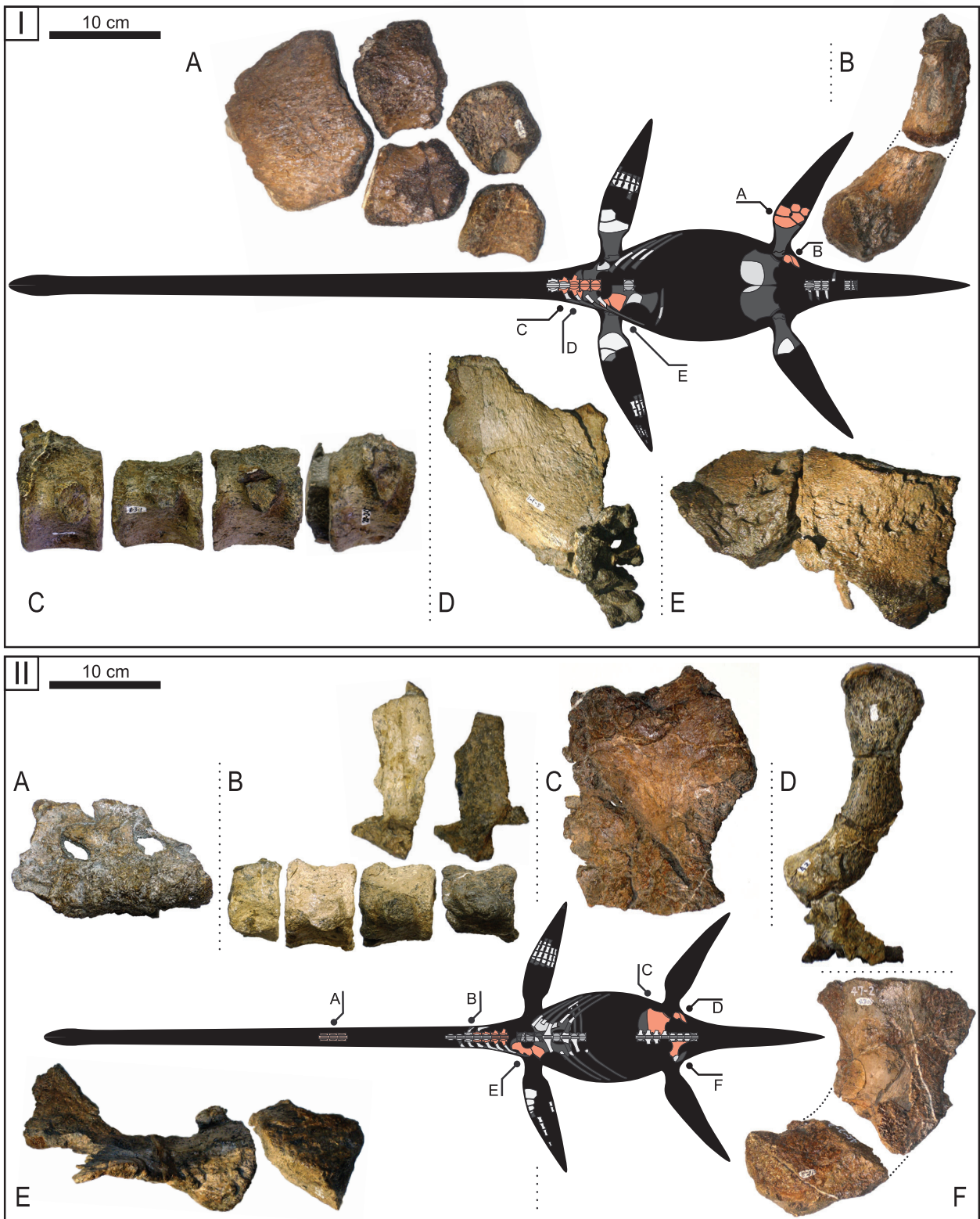


図4. 長頸竜類化石の産出部位. 復元骨格図は、写真で示す部位 (橙色) のほか、これまでに同定が済んだ部位 (白色) を示す. 椎骨 (I-C, II-A, II-B) のみ左から見た図で、それ以外は背側から見た図である. また、紙面左は I-A のみ脚の付け根の方向 (近位) であり、他は全て頭側となっている. I. 標本 NMV-1-L の化石骨. A. 右後肢, 背側観; B. 右腸骨, 内側観; C. 頸椎 (最尾側 2 個) と胸椎 (最頭側 2 個), 左外側観; D. 間鎖骨, 内側観; E. 左肩甲骨と左鳥口骨, 内側観. II. 標本 NMV-1-S の化石骨. A. 頸椎, 左外側観; B. 頸椎 (最尾側 4 個), 左外側観; C. 右恥骨, 内側観; D. 右腸骨, 内側観; E. 左肩甲骨と左鳥口骨; 内側観. F. 左坐骨, 内側観.